

留学生のための物語日本史

第 20 話 後藤新平

「男爵後藤新平君を内務大臣兼帝都復興院総裁に委嘱する」

昨日の地震はひどかった。それは、摂政宮（裕仁親王、後の昭和天皇）の後ろの壁が、皇居ではあり得ない形で崩れていることからわかる。陛下と摂政宮がいらっしゃる、日本の国体を象徴する皇居が、ところどころ壁が崩れ、亀裂が入り、そのうえ応急の支えをしているまま放置されているなどということは、本来は許されるはずがない。

1923（大正12）年8月24日に、第21代内閣総理大臣である加藤友三郎が急逝した。そもそもここから帝国における凶事が始まっていたのかもしれない。内閣総理大臣が欠員のまま、昨日9月1日の11時58分32秒に帝都東京を未曾有の大地震が襲ったのだ。

総理大臣代理は、加藤友三郎内閣で外務大臣であった内田康哉（うちだこうさい）が臨時首相となり、水野錬太郎内務大臣と赤池濃（あかいけあつし）警視總監が当面の責任者と決め、震災当日の混乱の收拾に務めるように命じた。翌日午後3時に、内田臨時首相の下で臨時震災救護事務局の設置が決まり、そして午後5時、第二次山本権兵衛内閣が発足したのである。

後藤新平は、1時間前に山本権兵衛に帝国議会に呼ばれたばかりであった。

「後藤君、君の手腕を生かして内務大臣として、この帝都の復興をやっていただきたいのだ」

そう言われた後藤は、国会から周辺を見回した。さすがに昨日の地震の影響による大火事は鎮火していたが、しかし、国会から東京駅の方面に目を向ければ、瓦礫と震災後の大火による焦土で、広大な「死の街」が広がっているばかりだ。

「山本さん、さすがに私でも」

「いや、君しかいないんだ。後藤君。君は、つい先日まで東京市長として、この帝都を知り尽くしている。それに、児玉源太郎の下で台湾を立派な街にしたし、また、南満州鉄道の総裁としては大連の都市開発も立派にやっている。すでに半分地震で傷ついた、この帝都東京を生き返させるのは、君しかいないのだ」

「しかし、ご存知のように、私は『黄金万能主義の権化』などと揶揄されております。鉄道院総裁時代などは、やりやすいように人事を一新したら『汽車がゴトゴト（後藤）してシンペイ（新平）でたまらない』などと揶揄され、それ以来、国政からは遠ざかっております。陛下の覚えもそんなにめでたくありませんから、ここはご辞退申し上げます」

後藤は深々と頭を下げた。

「あの時、東郷もそう言うておったよ」

山本は腕を組んで、後藤の方も見ずに焼け野原になった帝都の向こう側を見て、そう言った。

「今なんと」

「ロシアとの対戦を控えた時、日本は連合艦隊司令長官を誰にするか大いに迷った。最後に私が東郷平八郎に伝えた時、あの東郷もご辞退申し上げると言ったのだよ」

後藤は、ゴクリと唾を飲み込んだ。知らない間に、今まで感じたことのない緊張が走り、背中に一筋冷たい汗が流れた。

「私は、ご辞退申し上げますという人間を信用している。自分の実力と、事の大きさを知っているから、名誉の前に身を引くのだ。あの時、東郷はロシアと戦うことの責任の重さと、自分の実力では重すぎると感じていた。しかし、明治大帝の前で、陛下から自信を聞かれた東郷は『きっと、ロシア艦隊を葬って御覧に入れます』と、陛下の目を見ながらたじろぎもせず言いおった。自分のやるべきことをわかっている者は全く違う。私はそう思った」

「私は、東郷平八郎提督とは違います」

後藤はやっとの思いで声を振り絞った。しかし、山本は全くその言葉に耳を貸さなかった。

「陛下の前を辞した後、逆に心配になった私は東郷に聞いたよ。『どうやって戦うのか』と。東郷は事もなげに、『陛下からお預かりしている船を半分沈める気になればできる』とね、そのうえで東郷は『できなければ、間に合うものではないが、私の命をもって償う。それだけです』と言ったのだ。その時は私も腹を切る覚悟ができておったがな」

「山本殿、繰り返しますが……」

「よい、まだ東郷と違うというのか。よろしい、ならばこの状態で、一日も早く東京市民を安心させることができる医師の資格と、政治家の慧眼を持った者の名を挙げてみよ、いやいな」

「しかし、先にも申し上げたように、陛下の覚えはめでたくなく」

後藤は徐々に声が小さくなっていった。

「東郷の時もそう言っておった。現に、明治大帝は心配しておられた。私は陛下に『東郷は運のよい男でございますから』とだけ言った。明治大帝は、何も言わずに承認してくださったのだ。今は陛下の覚えの問題ではない。どのような手段を使おうと、一日も早く帝都市民を安心して生活させること、その責任の前から逃げるような政治家は、ここにはおるまい」

「はい、引き受けます」

後藤は、もう一度深々と頭を下げた。いや、山本の勢いに押し切られたというべきかもしれない。その数十分後に、摂政官の裁可を得たのであった。

「ところで、後藤内務大臣」

認証式が終わった山本首相は、すぐに国会内で閣議を開き、帝都復興院を設置した。帝都復興院は、速やかに連絡が回され、内務大臣や鉄道院総裁時代の後藤のブレーンが集められた。

「帝都をどのようにするつもりかね」

後藤は何も言わず、そこにあった紙に文字を連ねた。

- ・ 遷都すべからず
- ・ 復興費は 30 億円を要すべし

- ・ 欧米最新の都市計画を採用して、我国に相応しい新都を造営せざるべからず
- ・ 新都市計画実施の為めには、地主に対し断固たる態度を取らざるべからず

「この四つの基本方針にして、模範を花の都にするつもりでございます」

「花の都、パリか」

山本首相は腕を組みながら言った。目はすでに遠くパリを見ているようだった。

「パリの街が最もわかりやすいのではないかと思います。というのもパリは、街の真ん中をセーヌ川が流れており、その川を渡るための橋をうまくつなぐことによって街を広く、そして川があっても不便なく、いや逆に川を中心にしてくまく発展しております。帝都東京で、今回特に被災が激しかったのは、墨田川・荒川・江戸川と三つの川が流れる地区で、その川をうまくつないで発展しております。橋を中心にした街づくりは江戸時代からも行われておりましたが、ここは帝都にふさわしく、橋を大きく建て替え、帝都を広く、今後百年ののちも住みやすい街にしようと思います」

「橋か、気づかなかった。いや、私は海軍出身だから、橋は逆に船の通行には邪魔だからな」

山本はカラカラと笑い声をたてた。このように笑えるところが、この人物の魅力である。

「江戸時代に架けた橋は、すべて人が歩くための橋です。しかし、これからは自動車の時代でしょう。そもそも、この14万人が犠牲になり、そして東京市内の約6割の家屋が罹災している状況で、物資を運ぶのが人力というわけにもいかないでしょう。自動車が通れる道と橋。これが東京を発展させ、今の被災者に薬と食料を届ける唯一の手段であると確信します」

後藤は東京市長として思っていた理想を、この時とばかりに復興計画の中に盛り込んだのだ。

「これじゃダメなんだよ」

枢密院の伊藤巳代治（いとうみよじ）は、その後藤の案を蹴ったのだ。

「30億、ふざけんな。政府が土地を買い上げる。俺の土地は俺の土地だろう」

伊藤巳代治は、銀座の不動産王と呼ばれていただけあり、特に土地の収用には反対したのだ。

「すまん、後藤」

山本は後藤に素直に頭を下げたが、結局、復興予算は5億円に、土地の買い上げは区画整理に変更された。しかし、隅田川に架かる勝鬨橋などは現在も後藤新平の計画のままであるし、皇居を中心にした環状線と放射状の道路や、恩賜公園を中心にしたパリのようなコミュニティ広場は、百年たった現在でも、東京都民に住みやすさを与えている。この時に、後藤の言う通りにしていたら、東京大空襲でももっと被害が少なかったのではないかといわれているほどである。

1923（大正12）年12月27日に、虎ノ門外において皇太子・摂政宮が社会主義者の難波大助により狙撃を受ける事件が発生した。難波大助の放った銃弾は摂政宮には当たらなかったが、車の窓ガラスを破って、同乗していた東宮侍従長・入江為守が軽傷を負った。摂政宮は事件後、側近に「空砲だと思った」と平然と語ったといわれている。

この事件を受けて、当日夕刻、内閣総理大臣・山本権兵衛、内務大臣・後藤新平、司法大臣・平沼騏一郎以下全閣僚は、摂政宮に辞表を提出し、翌年1月7日に内閣が総辞職することになる。内務大臣であった後藤新平は、復興がうまくゆかなかったことと、この事件の責任を取り、以後、国政に復帰することはなかった。

晩年は貴族院勅選議員となり、終生在籍し、政治の倫理化を説いて遊説して回った。それと同時に、ボーイスカウトの初代総裁となり、子供の教育に力を入れたのである。後藤新平は常に、百年先の日本を見ながら行動していた人であった。朝鮮総督の斎藤実（さいとうまこと）を訪ねた際、後藤新平はボーイスカウトの半ズボンの制服姿で訪ねたのであった。その時の、旧知の斎藤への挨拶では、

「吾輩がかような子供っぽい服装をして来たのは偶然ではない、理由がある。今、この会長をやっているため普及宣伝ということもあるが、朝鮮であろうが、内地だろうが常にこうである。そのわけは大政治家は、しかつめらしいことばかり言っていては、だめだ。稚気がないといか

んということを念頭においているので、自分を律する意味においても、常にこういう服装をしているのだ。子供にならんと本当の大政治家にはなれんよ」

と語ったとされている。

このほかのエピソードでは、「虎の門事件」の責任を取って、内務省を辞めた正力松太郎が、退職後の仕事として新聞事業に乗り出した。経営を始める時になって、元の上司に当たる内務大臣であった後藤の元に資金の相談に行った。後藤新平は何も言わず数日待たせると、自宅を抵当に入れて正力の要望した金額以上の資金を調達し、自宅のことは何も言わずに正力にその資金を手渡したのである。読売新聞の社長がその正力松太郎だったことは有名な話だ。しかし、のちになって、自分に資金を貸してくれた後藤新平が自宅を担保に入れていたことを知る。正力は、借金を返そうとしたが、もうすでに後藤は亡くなっていた。そこで、正力はその恩返しとして後藤の故郷である岩手県水沢町（当時）に借りた金の倍近い金を寄付した。この資金を使って、1941（昭和16）年に日本初の公民館が建設されたのである。現在もこの「日本初の公民館」は水沢市に残されている。

1929（昭和4）年、後藤は遊説で岡山に向かう途中、醒ヶ井駅（滋賀県米原市）付近を走行中の列車内で脳溢血のため倒れ、京都府立医科大学病院に入院するが、4月13日に死去した。三島通陽（みしまみちはる）の『スカウト十話』によれば、後藤が倒れる日に三島に残した言葉は「よく聞け、金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。よく覚えておけ」であったという。

第21話 高橋是清

1936（昭和11）年2月26日、早朝、晴れてはいたものの、まだ冬の東京のその空気は冷たく身を切るような痛さであった。町の中は、もうじき来る雛祭りの準備で、質素ではあったものの、ぼんぼりが飾られているところも少なくなかった。

東京麻布台の歩兵第三連隊の兵舎には、第六中隊と第七中隊が緊急招集をかけられて集まっていた。

「諸君、明治維新の精神は、藤田東湖（ふじたとうこ）¹の『大義を明にし、人心を正さば、皇道奚（な）んぞ興起せざるを憂えん』とあり、これに多くの志士が応えたことによって大業を成し遂げた。この言葉こそ、維新の精神であり、畏れ多くも皇国国体を守る我らが決して忘れてはならない精神である。ところが今日、ロンドン条約以来、統帥権干犯（かんぱん）²されること二度に及び、天皇機関説³を信奉する学匪・官匪が、宮中府中にはびこって天皇の御地位を危うくせんとしており、国体を危うくせんとしている。今自分たちが国家のために起って、犠牲にならなければ却って天誅が我々に降るだろう」

演台に立った野中四郎大尉が、ここで一息ついた。

「諸君、皇国を守るために、我々に命を預けてほしい。そして君側の奸（くんそくのかん）⁴を取り除き、陛下の親政を仰ぎ奉り、国政を改革し、国民生活の安定を図る。昭和維新に力を貸してほしい」

¹ 藤田東湖…幕末の水戸藩の儒臣。藩主徳川斉昭を助けて藩政改革を進め、尊攘派の指導者として活躍した。

² 統帥権干犯…1930年、浜口雄幸内閣のロンドン海軍軍縮条約調印をめぐる政治問題。海軍軍令部の承認なしに兵力量を決定することは天皇の統帥権を犯すものだとして、右翼や政友会は同内閣を攻撃した。

³ 天皇機関説…1900年頃～1935年頃までの30年余りにわたって、憲法学の通説とされ、政治運営の基礎的理論とされた学説。天皇機関説は、議会の役割を重視し、政党政治と憲政の常道を支えた。しかし、政党政治の不全が顕著になり、議会の統制を受けない軍部が台頭すると、軍国主義が主張され、天皇を絶対視する思想が広まった。

⁴ 君側の奸…君主の側で君主を思うままに動かして操り、悪政を行わせるような奸臣（悪い家臣・部下）の意味。

「オー」

鬨の声というのは、まさにこのようなものなのであろう。千に近い軍人が一斉に声を上げた。野中四郎大尉は、安藤輝三大尉に目を遣る。安藤はサーベルを抜くと、頭上に掲げ、そして勢いよく振り下ろした。ちょうど目の前のテープが切られたように、事前の作戦計画に従って、そこに集まった完全武装の軍隊が各隊に分かれて動き出した。

野中四郎大尉の軍、約400名は警視庁に、安藤輝三大尉の軍、約150名は鈴木貫太郎侍従長の私邸に向かった。今回の主目標である首相官邸には、別動隊の歩兵第一連隊・栗原安秀中尉と、豊橋陸軍教導学校から向かった対馬勝雄中尉の約300名の軍が向かっているはずであった。そして、中尉である中橋基明近衛歩兵第三連隊・第七中隊長代理の軍約100名は、麻布台から赤坂の高橋是清の私邸に向かったのであった。

東京は都会とはいえ、まだ2月の早朝5時は寒かった。ちょうど昇りくる朝日を背に受けて中橋中尉は走った。いや、このような時に軍は、なるべく隠密に行動をする。凍った水溜まりを踏み、少し高揚した頬に冷たい空気を痛いほど感じながら、赤坂に移動したのである。

「止まれ」の言葉の代わりに、中橋はサーベルを抜き、それを宙に振り上げた。100名の軍は一糸乱れぬ動きで全員が歩を止めた。言葉を発さなかったのは、私邸の家人に気づかれ、高橋是清を逃がさないためである。中橋は、動きを止めた軍隊を見渡すと、宙に上げたサーベルを空に円を描くように一回転させた。「展開せよ」の合図だ。副官の中島莞爾中尉は兵30名を連れて裏口に回った。そして5名ずつを両側の壁に潜ませた。残りの兵はすべて門の前で歩兵銃を構えたのである。

「高橋是清大蔵大臣閣下に物申す」

中橋は、準備が整うとそのまま門を叩き、大声を上げた。

「何者だ。大声を出すな。近所の迷惑であろう」

まだ寝起きで寝間着姿のままの使用人が、左手で目をこすりながら、草履をかけたままの、とても大蔵大臣の使用人とは思えない姿で門を薄く開けた。

「御免」

中橋が、ぐっと薄く開いた門を押すと、隣にいた兵が歩兵銃の銃座で使用人の頭をしたたかに打った。一瞬何があったかわからない表情をした使用人は、意外そうな顔をして、そのまま気絶して倒れた。気絶させた兵は、そのまま銃を使用人に向けたが、中橋は大手でそれを制した。

「我らは国のために、君側の奸を取り除きに来ているのだ。罪のない者、関係のない者を傷つけることは許さん。抵抗しない者は、高橋大臣閣下以外、すべて傷つけてはならぬ」

「しかし、それでは事が大きくなってしまいます」

「縛るなり、あるいは監視を付けるなり、工夫せよ。彼らもみな、陛下の慈しむ臣民である」

「はい」

兵は、そのままそこに残り、門を守りながらこの使用人を監視した。

中に入ると、警備のために配置された玉置英夫巡查が扉を盾に抵抗したのである。

「高橋閣下、お逃げください」

玉置は必死に拳銃を撃ったが、しかし、巡查の拳銃と軍人の歩兵銃では武器の質が違う。そのうえ100名の軍に一人で抵抗しても多勢に無勢だ。少しの時間は稼げたが、しかし、玉置巡查も歩兵銃の前に倒れてしまう。なお、玉置巡查は、中橋中尉の意向の通り一命を取り留めている。

「高橋是清大蔵大臣閣下だな」

高橋是清は、布団から起き上がり、二階奥の自室に構えていた。逃げるわけでもなく、さすがに自分の運命を悟ったのか、居住まいを整え、そのまま扉の方を凝視していた。

「いかにも」

「天誅」

中橋は、腰から拳銃を取り出すと、そのまま高橋是清に向けて弾を放った。高橋の左肩から血しぶきが飛び散り、高橋是清の寝間着を血に染めていった。

「何故、我を襲う」

「陸軍予算を削減し、畏れ多くも陛下の統帥権を干犯し、国力を削減せんとするのは、まさに奸賊のなすものであり、許し難い」

高橋は、それを聞くと大きくうなずき、そして息を大きく吸った。

「君たち若い者は知らないかもしれないが、我々も、戦っておる。日露戦争の時には戦時公債を使い、軍費を調達しておるではないか。君たちは銃を持つものだけが戦っていると思っ
ているかもしれないが、その銃も、私を貫いた弾もすべて国の金で賄っておる。財政のことは陛下が我々内閣を信任してくださっておるものだ。我らは我らのできることで、我らの分野で専門的に陛下をお支え申し上げているのだ。それがわからんか」

中橋は、高橋是清の言葉をすべて聞くと、何も言わずにもう一度、引き金に架けた指に力を入れた。ドンという鈍い音がし、今度は高橋是清の右肩が貫かれた。

「何を言う。命が惜しいから命乞いか。恥を知れ」

「命など惜しくはない。そんなものが惜しかったら、そもそも大臣などやらず隠居して孫と遊んでおるわ。このような齢八十を超えた老人であっても、陛下が信任くださるから、財政を取り仕切っておる。また私の教え子、バルチック艦隊を打ち破った参謀秋山真之君などにも、すべて、国のために命を惜しむなど教えておる。皆そのようにして国を守ってきている。そうやって守ってきているから、君は軍に入っていることができるのではないかね」

ドン、中橋は、三発目の銃弾を放った。

「そもそも軍隊といえども、補給がなければ戦争もできまい。私は大蔵大臣以外にも農商務大臣も行い、国のために商業と農業の振興を行っている。そもそも、君たちが毎日食べている米も、そのようにして国家が一致団結して作っているものだ。君はそのようなこともわからずに、自分だけが天皇陛下を守っていると思っているのか」

ドン、中橋は四発目の引き金を引いた。しかし、この時には中橋の目に涙があふれていた。ほかに高橋是清を囲んでいる兵たちも、銃を下ろし、中にはすでに敬礼をしている者もいたの

である。

「私は、若いころアメリカ人の貿易商、ユージン・ヴァン・リードによって学費や渡航費を着服され、さらに、ホームステイ先である彼の両親に騙され、年季奉公の契約書にサインし、オークランドのブラウン家に売られた経験がある。奴隷というのはこういうものかと、惨めな思いをした。君たちには経験がないだろう。日本人をそのようにしてはならない。そのために、財政をしっかり行い、そして農業や商業の面で国を支えている。もちろん、軍の予算は減らした。しかし、それは一時的なものであり、これからずっと減らすというものではない。そのようなことをすれば君の言う通りに、国が弱くなってしまふ。しかし今、予算を減らして財政を立て直さなければ、来年以降、国が疲弊して、予算どころか補給もできなくなってしまう。そもそも、金融恐慌⁵の時に、200円札を使って金融危機を避けたではないか。君たちはそれで助かっているはずだ。そのような金融政策もわからずに、それで君たちは国を守れるのか。銃だけでは国は守れんぞ」

「うるさい」

中橋は、立て続けに二回引き金を引いた。高橋是清は胸を押さえて、そのままそこに突っ伏した。

「奸臣め、最後に言い残すことはあるか」

「お前ら、国を亡ぼすなよ」

「こっちから言うておくことがある」

中橋の声はすでに涙声になっていた。もしかしたら、自分たちは大きな間違いをしてしまったのかもしれない。本来は、この大臣を殺す必要はなかったのかもしれない。いや、もっと話を聞くべきだったのかもしれない。後悔と迷いが、頭の中を駆け巡った。しかし、出血量から見て、もう絶対に助からないことも事実だ。

⁵ 昭和金融恐慌…1927年に発生し、高橋は日銀総裁となった井上準之助と協力し、支払猶予措置（モラトリアム）を行うとともに、片面だけ印刷した急造の200円札を大量に発行して銀行の店頭で積み上げて見せて、預金者を安心させて金融恐慌を沈静化させた。

「高橋閣下。我々は、昭和維新を行う所存だ。よって、陛下に近い奸を殺し、国を良くするために動いている。よって、君側の奸ではない閣下のご家族は、私が傷つけないことを保証する。また、閣下はあの世で見えてくだされば、きっといい国を作るであろうから、安心して見守っていてほしい。以上」

高橋是清は、最後の力を振り絞って顔を中橋の方に向けると、声を振り絞って言った。

「名前を名乗れ」

「自分は、近衛歩兵第三連隊・第七中隊中隊長代理、中橋基明中尉であります」

「ありがとう」

高橋は、最後にかすかに笑みを浮かべた。高橋是清にとって、この「ありがとう」は、国に關することであったのか、あるいは、家族を守るといった中橋中尉に向けたものであったのか、今となってはよくわからない。

「御免」

中橋は、その笑顔を見ると、自責の念に耐えきれなくなり、サーベルを抜いてそのまま高橋是清の息の根を止めた。高橋是清、この時、岡田啓介内閣の大蔵大臣であり、享年82歳。天皇陛下は、高橋是清の死を悼み大勲位菊花大綬章を2月26日付で送った。

この日、陸軍青年将校とそれに率いられた軍1500名が閣僚を殺害し、クーデターを起こそうとした。これが有名な『2・26事件』である。岡田啓介首相は難を逃れたものの、身代わりとなって松尾伝蔵予備役陸軍大佐が首相官邸で栗原中尉らの手で殺されている。また、斎藤実内大臣、渡辺錠太郎陸軍教育総監が殺された。

安藤輝三は、鈴木貫太郎侍従長を襲ったが、その人物の大きさに触れ、自分たちのしていることが間違えているのではないかと思って殺害を躊躇し、負傷させただけで留めている。「鈴木侍従長閣下に敬礼する。気をつけ、捧げ銃」と号令し、鈴木夫人の前に出て「まことにお気の毒なことをいたしました。我々は閣下に対しては何の恨みもありませんが、国家改造のためにやむを得ずこうした行動を取ったのであります」と静かに語ったという。安藤は鈴木について

「噂を聞いているのと実際に会ってみるのでは全く違った。あの人（鈴木）は西郷隆盛のような人で懐の深い大人物だ」と語っている。

さて、2月28日に大勢が決し中橋中尉は、兵たちに檄文を發する。

檄文

尊王討奸の義軍は如何なる大軍も兵器も恐れるものではない。又如何なる邪智策謀をも明鏡によって照破する、皇軍と名のつく軍隊が我が義軍を討てる道理がない。大御心を奉戴せる軍隊は我が義軍に対して全然同意同感し、我が義軍を激励しつつある。 全国軍隊は各地に蹶起（けっき）せんとし、全国民は万歳を絶叫しつつある。

八百万（やおろづ）の神々も我が至誠に感応し加護を垂れ給ふ。

至誠は天聴に達す、義軍は飽くまで死生を共にし昭和維新の天岩戸開きを待つのみ。

進め、進め、一步も退くな、一に勇敢、二にも勇敢、三に勇敢、以て聖業を翼賛し奉れ。

昭和11年2月28日 維新義軍

中橋中尉ら将校たちは29日に反乱軍とされ免官となり、その後、特設軍法会議将校班による判決により、7月12日、銃殺刑となるのである。

中橋の辞世は以下の通りである。

『今更に何をか云はん五月雨に 只濁りなき世をぞ祈れる』